

## オレの日本原演習場

あかぎ ただし

### (一) 少年期

陸上自衛隊日本原演習場……！。西日本最大級だそう。

私はこの演習場と並々ならぬ係わりを持って今日まで生きてきた。

ここには現在、戦車部隊や砲兵部隊などが駐屯しているほか、しょっちゅうどこかの部隊がカーキ色の車両を連ねて、演習にやって来る。

思い出すままに、敗戦前からの演習場と私の係わりの一部分を綴ってみることにする。

私の書くことと史実には、くい違うことがたくさんあると思う。資料を調べる、などといった面倒臭いことは、私とは無縁である。面倒臭いことを一切せず、オボロに残る記憶だけをたよりに書くから、くい違いが出来るのは当然のことである。

私が北吉野国民学校に入学したのは、一九四二年四月のことである。

もの心がつく前から、私の故郷はキナ臭い場所だった。思えば私は、生まれるとともに大砲・

戦車・軍馬の嘶きといった騒音や軍靴の響き、火薬の臭いにまみれていたことになる。

二・二六事件は私の生後四か月足らずの時、日中全面戦争が始まったのは一歳と八か月の時、真珠湾攻撃は六歳一か月の時のことである。

私は人並みな軍国少年として成長した。私が生まれたのは、日本原演習場のまっただ中である。

家の前の道路を兵隊が行進する、というのは日常茶飯事のことだった。

大日本帝国陸軍の将兵が行軍をし、その隊列の中に高級将校がいたりしたら、たいへん誇らしく思ったものである。『高級将校』と言っても、せいぜい大尉くらいだっただろう、とは思いますが……！

敗戦前：帝国軍隊が大拡張されて、日本原でも廠舎二か所に収容しきれないらしい兵隊が、国民学校に駐留……と言うんでしようかネ……した。

そのために教室がスシ詰めになったかどうかは覚えていないが、兵隊サンたちは清潔な生活を送らせてもらえなかったらしく、学校がノミ

の巣窟になり、授業中に身体のアチコチが痒くなったこと・兵士の持ち物：装備……が粗末になって、(例えば飯盒は代用品の太い竹(孟定)の筒になり、その中身は飯ではなく、カユだという噂があったこと・熟年の勇士もオイチニオイチニと行進していたことなどが、記憶に残っている。周辺の集落で果物などは、熟れる前に、姿を消してしまうというようなことも珍しくなかった：ハラペコの兵隊サンたちが、行軍の途中に盗んで食べてしまったからである。もつとひどい話もあった。

朝炊いた一日分のご飯が野良仕事から帰ってみるとお櫃から消えていたという、とても、『ススメスメ ヘイタイススメ』とは縁のない『無敵皇軍』の姿が、そこそこに見られた。ともあれ、光輝ある日本の軍隊がアジア・太平洋各地で練り広げていた奮行と似たようなことが、ここ日本原でも、畑から台所の中にまで入り込んでいた。

そこそこで、空き巣ねらいにちかひことが頻発した、とも言われる。

私は何度か兵隊サンから、「ボクのところ……家……にはオネエチャンがおるか？」などと話しかけられた。

『どうしてそんなことを聞くんだ』という疑問は私にはなかったし、村人たちも、『兵隊とはそんなものだ』でも思っていたのか、特にそれが問題になったりはしなかった……ように思う。



日本原 塩手池

岡山県立津山工業高校『創立五十周年記念誌』1991年より

名誉ある軍人さんたちの関心が、につつき米英軍よりも若い日本人女性のほうに向いていたのかもしれない。

飛行場が建設された。国民学校の生徒も、建設作業にかり出された。

建設とはいふものの、ただ土を運んで来てツキ固めるだけだった。言ってみればチョット幅の広い、舗装をしていない道路みたいなものを作る工事で、建設というには少しおこがましく、造成とでも呼ぶべき、きわめて単純にして、そのくせ、ナカナカきつい仕事だった。

建設のための機材は、子どもはモッコと担い棒、それにシャベルやツルハシや鋏で、家用のものや斧と一緒に持って行った。二人でひとつのモッコを担いだ。モチロンのことながら

動員の日は、授業が休みだった。

私は、成績がとて蓄わなかったので、動員の最初の日には、『授業がない』ということが、とても嬉しかった。しかし、この重労働にはたちまちネをあげてしまつて、次の日にはもう、『勉強のほうラクでいい』などと考えた。

作業中、シンドクなつてアブラを売り、誰かにドヤサレたことも一度や二度ではない。ドヤシタのが誰だったのだろうか。あるいは、聖戦完遂を叫ばなければならなかった先生方だったかも知れない。

ドヤシつけたのが誰であつたにせよ、『大東亜戦争』勝利のための飛行場建設という、大切な仕事をサボルというのは、たしかに許し難い『非国民』的行為だった。

国民学校の生徒まで『動員』……というのは間違いで、当時は『勤労奉仕』と言つた……して、飛行場と言え言えるものが出来上がった。

しかしながら、出来上がった飛行場は、今にして思えば、『なんじゃ、コリヤ?』というようなもので、コントロールタワーらしい木造の塔のほかには、誘導灯、格納庫、整備工場なども一切無い、まことに殺風景で無節操な、ヤケに細長い広場がズドンと一本あるだけのものだった。

アメリカ軍がケタはずれな機械力を使って、想像を絶する早さで基地を建設し、日本軍はそのスピードについて行くことが出来ずに完敗し

た、というが、日本原でもそのへんの事情は同じだった。

完成した基地(?)にズングリとした、双発の飛行機が一〇機ばかりやって来た。後聞によれば、これは海軍の練習用の飛行機で、カミカゼを起こすには、おおいに力量が足りないものだったという。

飛行場への着陸コースが我が家の西、数百メートルのところ、あまり俊敏とは言えない双発機が、オソルオソルという感じで離着陸していた。夜間離着陸が出来るような飛行場ではなかった。夜は静かだった。

一度だけ、単発の飛行機が着陸を誤り、滑走路近くの電線に引掛かつて墜落した。三座の飛行機だったと思うが、引つ繰り返つてペシヤンコになっていた。自分も肩の皮をスリむきながら作るのに力をつくした飛行場で、無敵日本軍の飛行機が無残につぶれているのを見て、エラくなさけない思いをした。それまでは、落ちるのはアメリカの飛行機だ、と教え込まれていたもので、これは大変なショックな出来事だった。

練習機は、一九四五年八月一七日……だったと思うが……全部焼き払われた。私は機体の焼け残りから破片を拾いだして、長方形に切り、ジュラルミン製の下敷きを作った。そのころ金属製の下敷きなんて、どこにもあるなんてものではなかったから、異彩を放った。私が、国有

財産の横領という犯罪を犯したのは、後にも先にもこのときだけである。

けれども、機体の残骸を拾った、などというのは、まだツミの軽いほうで、ひどいのはガソリンがイッパイ詰まったドラムカンを持ち帰って逮捕された人がいる、とか、パイロット用の上等なシートが、葦葺き家屋の土間にドデンと置いてあった、というような話もあった。ともあれ、敗戦のドサクサが草深い田舎にも押し寄せて来た。

## (二) 進駐軍

八月の末に：何日だっただろうか？：、全校集会があった。二学期の始業式だったのか、それとも敗戦という非常事態に直面しての臨時登校だったのかは覚えていないが、全校生徒が校庭に集合した。

初めに校長の話があった。

それまで聞き馴れていた演説調ではなかった。『これからの日本は、民主主義と平和の国に生まれ変わる：』というような講話だった。私には「ヘイワ」とか「ミンシュシュギ」なんて、何のことやらサツパリ理解出来なかった。それまでさんざんたたき込まれてきた「キチクベイエイ」・「ダイトウアケンセツ」・「イチオクイッシン」などというのだった。『みんなそう言うからそうなんだろう』くらいにしか理解していない私の単純な頭脳は、突然の変化もごく自然に

反応して、特別な感慨などは湧きようもなかった。

それにしても、ついこの前まで「ウチテシヤマン」とか、「ヒツショウノシンネン」とか「ホシガリマセン カツマデハ」などと絶叫されていた先生方の心の中はいかばかりだったことか、今にして同情を禁じ得ない。

そんな次元の高い話はさておいて、校長訓話の後、別の先生からは、全く別の話があった。

「ここにも外国の兵隊が来る。外国の軍隊はジープという自動車を使うそうだ。この自動車は木炭車とちがつて早く走る。エンジンの音も静かだから、ひき殺されないように、よく気をつけなさい」

『ジープって何だろう？』

純朴な国民学校の生徒であったわたしは、『ジープ』というものの方に心が向いていった。

先生の話のとおり、ジープに乗った『外国兵』がやって来た。

私たちは『茶色の髪をして目ん玉が青く、鼻がトンガツているのはアメリカ人』と思い込んでいたが、この『外国の兵隊』はオーストラリア・カナダ・ニュージーランドなどからやって来たもので、『進駐軍』と呼ばれた。『占領軍』という言葉は、ほとんど使われなかった。

はじめのうち、敗戦国民は、大人も子どももこの異人をおそれるおそれる眺めていたが、じきにエライことに気づいた。

『アメリカ人』も笑うんじゃなあ…』

『鬼のようなヤツラ』と教え込まれていたのに、その正体がニコヤカに愛嬌をふりまく『アメリカ人』だったので仰天したわけである。

お人好の兵士たちからうまいことチューインガムをせしめる子どもは、たちまち英雄になった。『アメリカ兵』たちは子ども好きでやさしかった。アレヨアレヨという間に私たちの『よき隣人』になった。この隣人から、私たちはいろんなことを学んだ。

ナマの英語も、学んだ。

勝利者としてやって来た連中だったが、今にして思えば随分ブロークな英語を喋っていた。兵隊が、『トウモロウズ・トウモロウ』と言った。片田舎にも『物知り』の日本人がいて、これを日本語に訳してくれた。

「トウモロウとは明日のことである。『ズ』は、『ナニナニの：』という意味である。明日の明日だから、明後日である」

これが、私が初めて彼らから学んだ、『ほんもののイングリッシュ：！』だった。『なんだ、英語なんて簡単じゃないか…！』

兵隊たちはおおらかだったが、『進駐軍』となると話は別である。彼らは旧日本軍でさえやらなかった乱暴をやつてのけた。

実弾射撃訓練がそのヒトツである。射撃訓練は、一九四七年の一月から始まった。二か月くらい続いた。その訓練期間中のことだった。

進駐軍は私の家の南、数百メートルのところから大砲を並べた。砲兵部隊の陣地が出来た。民有地に…である。たしか、町川神社の御旅所あたりだったと思う。

屋根の上からは大砲が見えた。砲口からパツと火が出る。間髪をいれず頭の上から、シュルシュルと空気を切り裂く音が降ってくる。次に北の方角で、ドカーンと炸裂音が響く。七五ミリ砲だったそうだ。

二か月の間に何回こんなことがあっただろうか。頭上を実弾が音をたてて飛ぶので、気味悪い思いもさせられた。

『もしもあの弾丸がウチの上を飛んでいるときに破裂したらどうなるんだろう?』

そんな不安もあったが、飽かずに発射の火炎を眺めていた。

戦争は終わっても、私と火薬の匂いや砲声との縁は切れなかった。砲弾は那岐山の麓のあちこちに撃ちこまれた。

奈義町誌は、『駐留軍が本格的な実弾射撃を激しく実施し、東は菩提寺の方までところかまわず火砲を打ち込んだ』と記録している。

沖縄県の人々が、こんな思いで暮らしているんだ、ということを知ったのは、ずっと後のことだった。

この訓練に先立つ一九四六年三月、旧陸軍日本原演習場のうち、国道の北側全部が進駐軍に接收された。『接收』という意味不明瞭な用語で

あるが、要するにフルサトが外国の軍隊に占領されたわけである。

接收のあとやって来た外国兵が、先述のカナダ兵なのか、それとも本物の『アメリカ人』なのか、私は全く関心を持たなかった。どちらでもよかったのだ。

そして…

『進駐軍を相手にひともうけ…』と、あてこんだ人々が(多分、土地の人ではない)、国道沿いの民家を借りてバー…今風に言う『スナック』ですネ…やダンスホールを開業した。現在の日本原交差点のあたりから東、数百メートルばかりの間に、ケバケバしい色彩の英語の看板を掲げた建物がズラリと並んだ。『蓄音機』が真つ昼間から騒音を撒き散らしていた。

進駐軍といっしょに、私たちが初めて見るタイプの日本人女性たちもやって来た。私たちはこの女性たちが何物なのか分からなかったが、大人たちを真似て『パンパン』と呼び、その存在に刮目した。

なにしろ、日本人といえば、オンボロの着物、岩塩で味を付けた雑炊や舌が曲がるほど辛い塩魚で寒さと飢えをしのいでいる、というのに、彼女たちはスーツにハイヒール、パーマネットと、サツソウとしたいでたちで、タバコを啜えて闊歩していた。そんな彼女たちが金髪碧眼の男たちと腕を組んで歩いても、私は別段、民族意識を刺激されることもなかった。

彼女たちは、付近の民家の一隅を借りてねぐらとしていた。

私は、『なぜ彼女たちがそうなったのか』などとは、考えても見なかった。

純農村とはいえ、雑炊に明け暮れ、空腹をかかえた子どもにとつて、この女性たちは、異次元の生物とでもいべき存在だった。

その頃の、ワラ葺き屋根の間の、ケバケバしいペンキ塗りの看板の通りの姿と、基地反対闘争の様子は、雑誌『部落・四五号』に、高知県の尾崎勇喜氏のルポ記事として掲載されている。

### (三) 基地の町

青年達が闘争に立ち上がった。私の地区：現・奈義町上町川地区：からも、石川県・内灘や東京都・立川などに向いて、基地反対運動の先進地の視察をした。こんな動きは、その頃全国的に盛り上がっていた青年団活動の延長線上で取り組まれたものだろうと思う。視察報告会には大勢の住民が集まった。青年達は『頼もしいアンチヤンたち』だった。そのころ男も女も、大人も子どもも『戦争はコリゴリ』という思いが強かった。『戦争とは飢えることだ』ということも、しっかり認識していた。

その一方、演習場のアチコチに、英語と日本語で書いた看板が立った。

『米国資産につき、無用の日本人の立入を禁止する』

演習場には地元地区民の入会地がある。また米作水田もかなりあったので『無用の…』ということになったのだろう。

いかにも日本のお役所らしいソツのない、それでいて無礼な看板である。

このあとも日本原基地返還運動は続けられ、一九五三年には関係六か村日本原接收反対期成会を結成、六三〇〇人が参加して『接收反対合同村民大会』が開かれるという、この山村としては空前の出来事も起った。

住民の演習場問題についての関心は高く、一九五八年には、小学校PTAや青年・婦人団体なども実弾射撃反対運動を行った。

朝鮮戦争が始まった。この戦争が、ヘンな形で私たちにも恩恵を与えてくれた。私にとっての『朝鮮特需』だった。

演習場を使用する軍隊が、カナダ軍などからアメリカ軍と警察予備隊に替わった。朝鮮半島から休暇のアメリカ兵が来るようになった。最前線からの一時帰休というやつだ、とは後で知った。

このアメリカ兵が、私たちの絶好のカモになった。

現在の津山圏域消防組合日本原出張所の北、数百メートルのところに、小さな農業用の溜め池がある。この池（新池という）は当時、地元の子ども達が夏休みに入ると、水泳…というよりは水遊び…をする場所だった。

別に誰かがそう決めた、というのではなく、夏休みになると誰いうとなく小学生や中学生が集まって、無秩序に水遊びをし、遊び飽きると思い思いに帰って行く、というような場所だった。

今なら『危険な場所』だということで、先生や教育ママたちから、近付くことすら禁止されるような場所だけれど、当時は子どもたちにとって、溜め池は危険な場所でもなんでもなく、生活圏の一部分だった。

午後になると、この池にアメリカ兵もやって来た。彼らは午前中に軽く演習をして、午後は今で言う、リフレッシュタイムというようなことであったのかも知れない。たいていは兵隊だけが来ていたが、まれには先に書いた『女性』もやって来た。兵隊たちは水着など持たずにやって来て、堤防でいきなりシャツとズボンをめぎ、文字どおりのスツポンボンになって、ザンプとばかり池に飛び込んだ。

これを見た私たちは最初、ビックリした。なぜといって、アメリカ兵たちはシャツとズボンの下には何も着けていなかったのだから…！。さすがにヤマトナデシコは、オールヌードにならなかった。

ひとしきり水の中で騒いだヤンキーたちは、やがて亀の甲羅干しよろしく堤防に寝そべってノンビリとしていた。あるいは、武運つたなく朝鮮半島のどこかで、神に召された仲間のこと

を思い出したのかも知れない。

兵隊は私たちに、さつき脱ぎ捨てたシャツやズボンと洗濯石鹸：固形だったと思う…と、いづくかの紙幣をつき出した。むろんこの紙幣は軍票ではなく、レッキとした日本円だった：あとでそのお金で買い物したら、チャンと通した。たいていは一〇円紙幣だった。

ドルが高いのか、それとも危険手当が支給されていたのか、あるいは経済観念が乏しいのか、それとも日本円の知識がないのか、彼らは、じつに気前よく『洗濯代』を支払っていた。

石鹸は顧客持ち、水は代金不要の溜め池の水、乾燥させるための光熱費はお天道様の恵みと、はやく言えば、もていらすずで、しかも料金はソックスだろうがシャツだろうがズボンだろうが、なんでも一品一〇円均一、しかも全てが現金決済という、私たちにとって、まことにポロイ商売だった。

武器の製造販売とか、危険海域への武器弾薬食料などを輸送をするのではなく、遊びの片手に清潔と友好を販売して、平和な国家の夏、平和な少年たちがG・Iの上前をはねて、いくばくかの戦果を上げたわけである。

一部には、かなりエゲツナイ稼ぎをやっていた仲間がいた。

この仲間たちは、西瓜をかかえて溜め池にやって来た。西瓜を池に放り込んで冷やす。兵隊たちが来ると、いつも持ち歩いている折畳みナ

イフ：『肥後の守』という、いってみれば、工作用の小型ナイフ：で西瓜を切り分け、売り付けていた。

兵隊たちは、「オー、ワイルメロン：……」などと言って、むさぼっていた。

これも、たいてい一切れ一〇円で売れた。

私ももう中学生だったので、" This is a book " くらいは理解出来たが、『ワイル』などという、バリバリのアメリカ語は分からなかった。分からなくても、『営業』に差しつかえるようなことは全くなかった。人間どうしというのは有り難いもので、もし熊や猪が相手だったら、私たちの商売は、こううまくはいかなかったにちがいない。

噂によれば、…あくまで噂ですが…、初めのうちは自宅の西瓜畑のものを商品化していたが、後にはヒト様の畑の『ワイルメロン』を売ったツワモノもいたという。

少国民魂を残し持った仲間、やるときには結構やっていたのである。

それにしても、気のいいアメリカ兵もアメリカ兵なら、そのチャンスをやけ目なく利用した日本少年も日本少年である。

エッ私ですか…？。私は品行方正です。そんな『悪事』に手を出したことは、一度もアリマセン。

ただし、正直に洗濯屋稼業だけに励んだ私ではあるが、残念なことに、悪銭身につかずの譬

えのとおり、その稼ぎが、どこにどう消えて行ったのか、一円の蓄財も出来てはいなかった。サンフランシスコ体制がスタートした。進駐軍が引き揚げ、日本原は警察予備隊の演習場へと、中身はそのままで衣が変わった。

一九五五年、三か村が合併して奈義町が出来た。その奈義町が、翌一九五六年、七項目の基本方針を決定した。

『(一)外国軍の駐留には絶対反対(二)旧来の慣行に係わる地元民の権益は絶対を守る(三)将来の強制拡張は絶対反対(四)施設を作るときは必ず奈義町内に設置する(五)演習のため、道路や農地・農作物を害したときには十分の補償をする(六)関係地区の道路その他の施設を充実する(七)その他地区民に及ぼす損害には、相当の補償をする』

この条件に関し防衛庁と公文書で確約する。万一容れられない場合は、日本原を演習場とするに絶対反対である』

この決定を機に、外国軍はお断りだけど自衛隊ならばよろしい、ということになった。奈義町の進む方向が決まった。

#### (四) 今、日本原は

自己紹介をするとき『日本原基地のある所だ』と言うと、「ナルホド……！」と頷いてもらえること

が多い。ベンリなものである。そしてまた…、

「奈義町に住んでいると安心だろう…」とも言われる。

何が安心なのか…！

天変地異が起つたとき、目と鼻のさきに自衛隊がいる。何かあればすぐに救援してもらえ。これほど頼もしいことはないだろう。たしかに、そういうこともないとは言えない。二〇〇四年の台風二三号のときには、電気と水道が止まってしまった。このときは、自衛隊が給水してくれましたので、私たちはずいぶん助かった。給水活動をする隊員たちはみんなニコヤカで、小さなポリタンクさえも運んでくれた。『被災地住民』にとっても親切だった。

しかし、どう言い繕ってみても、日本原は軍事基地である。

私も、こんな経験をした。

二〇〇三年九月の中頃のある日の朝のことである。私は駐屯地に隣接した溜め池の堤防で、撮影をしていた。岸边にアオサギがたずんでいたからである。アオサギは小魚を狙っていた。なかなか人に人つた構図が出来ないので、ずいぶん長くファインダーを覗いていた。

何コマか撮影した。サギもどこかに行ったので撮影を止めた。そのとき私は、ほんの数メートル先に停車しているカーキ色のトラックに気づいた。

私とトラックは、有刺鉄線の柵…鉄条網で隔てられていた。軍隊と住民を隔てる鉄条網によ

って、である。

トラックには二人の隊員が乗っていた。そのうちの一人は助手席にいて、大きな双眼鏡で私を監視し、もう一人は、運転席に座り、無線電語機を持っていた。無論のこと、電話機の隊員が誰とどんな会話を交わしていたのかは分らないが、双眼鏡のほうは正確に私に向かっていった。

なぜ、見られていることが分かったのか？

私もズームレンズをいっぱい延ばしてトラックを見たからである。両方の視線が合うと、トラックはすぐに鉄条網の内側の道路を走り去った。

このとき私は、まるで私自身がスパイになったような気がした。自衛隊から見れば、日本国民は守るべき存在ではなく、監視すべき、アヤシイ存在だったらしい。沖縄戦当時の日本軍と沖縄県民の間もこれと同じだったんだな、と思った。彼らは、救援活動の時とは全く別の顔をしていた。

敗戦直後、疎開者、旧軍人、海外からの引揚者などが帰農隊ということで、旧軍隊の廠舎に入居した。

最初に帰農隊が入居したのは、一九四五年八月のことであるが、この人達は、(占領軍が出した命令でアツという間に姿を消した。

本格的な開拓が始まったのは一九四六年四月、国道五三号線より南側の全部が接収解除になっ

た後だった。このとき入植したのは、岡山県の銚衡(選考?)で選ばれた戦災者九〇戸余りだった。

開拓者というが、元来都市住民であった入植者たちにとつて、高原での開拓生活はなみ大低のことでなかったに違いない。初めての農耕作業・不慣れた交通事情などの悪条件を乗り越えて定着したのは、九〇余戸中、八八戸だった、ということである。

しかし定着した人達も、一九六四年、耕作地の調査が始まり、演習場が大蔵省財産から防衛庁財産に変わったのを機に、あちこちに移動し、今では二〇戸前後：開拓者が何戸残っているのかは、地域の状況が激しく変化するため、正確な数字は書けない：が残っているだけである。

私の小学校の同期生にも、男子五四名中、開拓者の子どもが四人か五人いたはずであるが、全員移住してしまつて、今では地元には一人も残っていない。女子に開拓者の家の子どもが何人いたのか、全く記憶がない。

今日も上空にはヘリコプターの爆音が轟き、私の自宅のすぐ近くからは自動小銃の発射音が聞こえて来る。わが家からほんの数メートル離れたところにある通称「戦車道路：正式には『東西連絡道』と呼ぶ：」を一五五ミリ榴弾砲を引く張ってカーキ色のトラックが砂塵を巻き上げて走って行く。ヘリコプターもジェット機も来る。ヘリコプターの中にはアパッチの異様

な姿もまじっている。ジェット機の撮影を試みるが、カメラのほうが超低空飛行のスピードにナカナカついていかず、出来上がったプリントの端っこに、それと見ればそれらしい物体が小さく写っている。まるで、未確認飛行物体の映像である。

ジェット機が演習地上空を通過すると、数秒後にはタタタタタタと軽快な発射音が聞こえてくる。対地攻撃と対空射撃の訓練である。

以前、大韓航空機がサハリン沖で撃ち落とされたときには、大型のヘリコプターV107が一〇機ばかりやって来て、とてもウルサイことだった。

世界のどこかで何かがあれば、ここもたちまち連動して自衛隊の動きが活発になる。

駐屯地だけでなく、数年前からは演習場である原野も有刺鉄線できり囲まれ、『立入禁止』のプレートが掛けられた。

一応、プレートの隅っこに小さい文字で、『協定に基づく地元関係者を除く』と書いてはあるが：！。

つい先年のことだった。「演習場のゲートに『施錠』をしたい」と、駐屯部隊から、関係地区：演習場に隣接する地区：に申し入れがあった。

私の地区でもこのことで、総代会で議論した。結論は『演習場は軍事基地ではない。施錠は必要ない。錠をかければ日常生活にも不便が生ま

れる』ということになったが、本当にカギが掛かってしまった地区もある。

友人が、駐屯地に申し入れたということを聞いた。

『ヘリコプターは、俺の家の真上を飛ばな。ホバリングもするな…!』

彼は長年、呼吸器や腎臓の不調に悩んでいる。私の家も、大砲の発射音で窓ガラスが、ビリビリと振動する。自動小銃は何かがはじけるような、『可愛い音』を聞かせてくれる。

奈義町誌をひもといてみた。そもそもの演習場の始まりを調べるためである。

ここまで書いてきて思い出した。

私が国民学校の生徒だったころ、憲兵と巡査と注射は『三大恐い物』だったが、大日本帝国陸軍はどうやら訓練用の弾薬にも不自由だったらしく、演習地とはいっても、現在の自衛隊ほど実弾射撃演習は行わず、わりに自由に立ち入ることが出来た。

所々に土を盛り上げて、戦車の形にした物もあった。兵隊の姿を見ながら、草をとったりもしたが…。

演習場の草っ原のところどころに、屋敷跡が残っていた。住民が立ちのかされたのは、それほど昔ではなかったはずである。

町誌には、明治四〇年(一九一〇年)に用地買収が始まった、と書いてあった。日露戦争の戦訓に基づいて、一四〇〇ヘクタールの演習場が

出来たという。古老から聞いた。

『土地の取上げの代金は、ソリヤア安いもんだったそう。一坪がマア、ハガキ一枚ぐらいの値段だったと言うケン…!』

追い立てられた人々の末裔の一部が、今ここに住んでいる。

無論、私も住んでいるし、これからもここで暮らすことになりそうだ。

外部からは見えない丘陵の向こう側には、タコツボ陣地：一人用ではなく、一〇人以上が入れそうなもの：が出来ている。戦闘部隊が展開する前に、建設用機械を持った施設部隊が作るものだ、と聞いた。

対テロ作戦の訓練用の施設も出来ているし、溜め池の樋門管理棟への通路が有刺鉄線で封鎖された：もつともこれは私たちの申し入れですぐに撤去されたが：こともある。

今、ここでも自衛隊とアメリカ海兵隊が共同訓練を行うという計画が、住民がよく知らない所で練られ、その実現は時間の問題になっているようだ。

五〇余年前にこの地で、異国の兵隊たちと住民との間にどんなことがあったのか。あのころの日本人は、大人も子どもにも知らされないまま、生きるのに精一杯だった。

こんど日本原にやってくるという、青い目の兵隊たちはいったいどんな連中だろうか。

ここからもイラクに自衛隊員が派遣され、戦

争の匂いが、またぞろこの山里にたちこめてきた。

あれから六〇年：かつての私たちのように、今の子ども達がチョコレートやチュウインガムをねだる、という、国辱的な様子は見られないだろう。それどころか、異国の兵隊に関心すら示さないかもしれない。

日本が平和な証拠かも知れないし、逆に、子ども達の未々に黄信号が点滅しているというところかも知れない。

後世の日本人が、こんな動きをどう総括をするのだろうか。できることならば、それを見届けたい、という私の思いとは係わりなく、敗戦六〇周年がそれとは言わずに過ぎて行く。

(完)

本稿は、美作民主主義研究会編『美作民研』(第五号、二〇〇六年二月号)に掲載した同名の回想記に加筆訂正したものである。